

昭和 49 年、筑波大学に入学した年の授業で「君達は今後医師過剰の時代に医学部に入学してきた」と言われた。お先真っ暗な授業だったのはっきり覚えているが、少子化と人口減が始まって、今後特に小児科と産科は失業の時代に突入すると言われた。唯一の医師不足は僻地医療の問題であると。当時、世の中には無医村という言葉も使われていたが、茨城県では七会村の国保診療所に外科医師が所長として着任され無医村が解決されたという記憶がある。ともかく 40 年も前に医師不足どころか医師過剰の時代がやってきて、医師偏在が問題であることが示唆されていた。しかし当時は、昭和 47 年に自治医科大学が開校し僻地医療解決の兆しと考えられ（結果としては十分な成果は残せていないが?）、各県一医大構想の下、昭和 49 年に筑波大学も茨城県唯一の医学部として開校という新設医学部ラッシュの時代であった。

時を経て平成 26 年、人口 10 万人に対する医師数の平均 (245 人) を下回るワースト 3 に、埼玉、茨城、千葉と言った関東地方の 3 県が連ねているのは意外な感じがする。茨城県についていえば、医師数は昭和 50 年 (1975 年) 1727 人が平成 28 年 (2016 年) 5240 人と 3 倍にも増えているにもかかわらず

らずである。人口 300 万弱、47 都道府県で 11 番目に人口が多く、東西 (鹿行～古河) 南北 (取手～北茨城) と広い面積が関係していると思われる。県内二次医療圏は 9 地域に分類されているが、全国平均、茨城平均と言った基準から見ても明らかに突出して医師の充足率が低いのは (鹿行) (筑西・下妻) (常陸太田・ひたちなか) 地域であり、その他はそれほどの医師不足とは考えにくい。全国平均だけで判断するならば、つくば医療圏以外、茨城県はすべて平均以下である。医師数が増えていても過剰にならず、僻地医療も解消しない。いつの時代にもいろいろなことをいう人がいるが、当たったためしがないとまではいわないが、外れた時に責任を取ったということも聞かないので、人のいうことはほどほどに聞いて無難なのかと考えてしまう。

先日、茨城県保険医協会と、国民民主党との第 1 回合同勉強会が開催され、県内の医師偏在問題についての意見交換が行われた。私を含めた筑波大学の真面目な取り組みに関しては、そちらの報告をご覧いただくとして、この問題の本質を解決するには、医師が行きたがらない地域や診療科には理由があるということだ。私の好きな言葉に野球の野村監督の「勝った試合にワケ (理由) はなくても、負けた試合にはワケがある」まさにその言葉である。

## 論壇

### 医師不足? 医師偏在? 40年前に指摘された僻地医療が 解決されていないのは?

茨城県保険医協会副会長 福田 潔